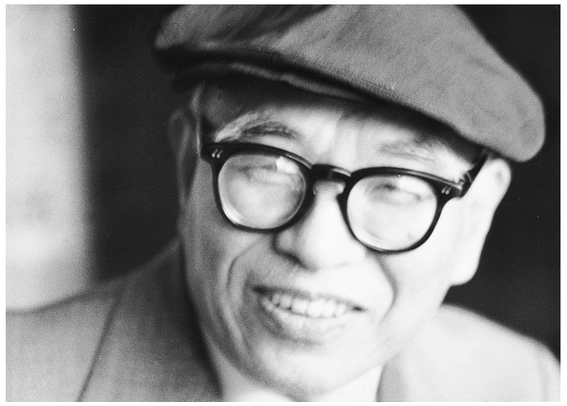
生涯を無産者医療運動に投じた人がいた

～岩井先生の足跡



晩年の岩井弼次先生

「無産者の慈父」と呼ばれ

「大阪の無産者診療所の諸運動は岩井弼次（ひつじ）を医療面の支柱として発展してきた」（「民主医療運動の先駆者たち」）

戦前から大衆のため献身的に活動し、「無産者の慈父」と呼ばれた岩井先生を今ではその名前を知る人はほとんどいません。しかし、無産者医療運動の歴史を紐解くとき、岩井先生とヘルスコープおおさか、民医連とは大きなつながりが見えてくるのです。

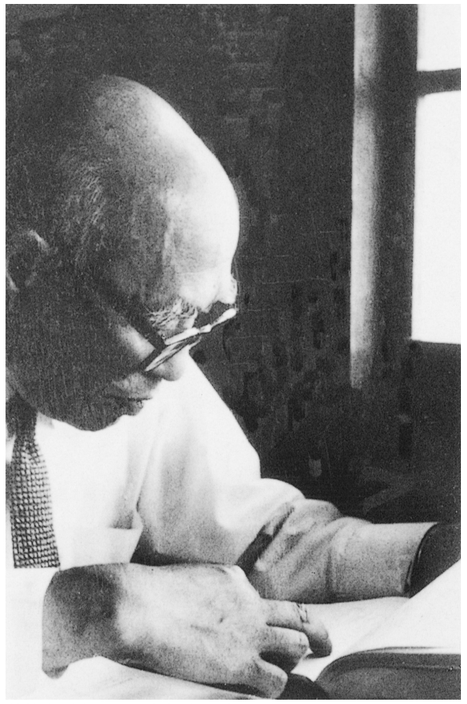
「医療の社会化」めざし 公衆病院設立

岩井先生は一八九四年、大阪三島郡（現在の高槻市）に農家の三男として生まれます。天王寺師範附属小学校から天王寺中学校へ進み、一九一二年京都医専（現在の京都府立医大）に進みますが、在学中に堺利彦、山川均、大杉栄などの著書を読み、ロシア革命にも影響を受けています。卒業後、実費診療所に関心を持ち上京、三年間診療に従事します。しかし、階級的立場に立たず、いわば「安かろう悪かろう」の資本主義的合理化の経営方法に不満を感じ、自ら経営することを希望し、一九二五年、大阪東野田に桜ノ宮公衆病院（内科、耳鼻科、眼科、約五十床）を設立します。「公衆」とは「社会化」を意味しており、公衆病院は「医療の社会化」が目的でした。三三歳で労働者農民党に入党し、官憲の妨害、弾圧を受けながらも「労農解放運動の医療部隊の一兵士」は昼も夜もなく献身的に治療と救援活動を行いました。

戦前暗黒の時代 二度の投獄受ける

一九二九年、山本宣治労農党代議士の暗殺に抗議し、雑誌「戦旗」が無産者病院設立のアピールを出しました。無産者病院設立発起人会の岩井先生や小岩井浄弁護士（横堤で自由農民学校を主宰）らの活動により、農民、労働者の幅広い支持を受け、東京で大崎無産者診療所（一九三〇年）が、翌年大阪初の大阪無産者診療所が現在の野田阪神近くに設立されます。

一九三三年三月、片町診療所で診療に従事していた岩井先生は治安維持法違反容疑で官憲に検挙され、堺刑務所に投獄されます。一九三七年、二回目の投獄から釈放されてからは蒲生の居宅（現蒲生厚生診療所）で診療を続けました。戦争末期の荒れ狂う空襲の中でも往診依頼をいとわず、命をかけて大衆との結びつきを重視しました。



執筆中（吹田民主診療所にて）

戦後民主診療所運動の中心に

一九四六年、岩井先生を代表とする関西医療民主化同盟が結成されて戦前の無産者医療運動を引き継ぐ民主診療所運動は本格化します。翌年、西淀病院や十三診療所が診療を開始する中、一九四八年岩井先生は東成で国際平和病院院長に就任します。当時、刀根山病院にいた木下先生も峠事務長に請われ国際平和病院に就職しています。西淀、十三と上二診療所とともに大阪民主的病院診療所連合会（現在の大阪民医連）を結成し、関西での連絡会ともに会長を歴任し、全国民主医療機関連合会（現全日本民医連）の創立総会では名誉会長に推戴（たい）されます。

国際平和病院開院を前に（1948年）

一九五三年、岩井先生の還暦祝賀会席上で「ゆかりの地である城東区」に還暦記念診療所建設が提案され、城東診療所（木下栄作所長）が設立されました。岩井医院も蒲生厚生診療所として個人所有から大衆運営に変更されます。

革命の夢を抱きながら

しかし、人民が主人公の世の中を実現させる革命の夢もかなわないまま、岩井先生は三島無産者診療所の流れをくむ吹田民主診療所（現相川病院）の理事長として病院化を図りますが、資金融資の途を断たれ、さらに医師などの退職も相次ぎ、事業遂行は困難を極めます。その頃持病の心臓病が悪化したため一九六七年、奈良に居を移し、友人の岡谷医師のもとで診療に従事します。

一九六九年、三度目の心臓発作を起こし一月十一日、惜しまれつつ七十五年の苦難にみちた人民解放の生涯を閉じることになります。牛のようなねばり強さとその寡黙さ、愛嬌のある丸眼鏡が対照的で誰からも慕われ、大衆とのつながりを至上の悦びとする先生は、亡くなる直前まで臨床家として診療にあたりました。

無産者とは

生産手段を持たない労働者、農民階級のことをいう。一般に、資本家、地主から搾取を受ける対象となる。